

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 25, No. 3 神奈川県立生命の星・地球博物館 Sept. 2019



アオゾメクロツブタケ

Rossbeevera eucyanea Orihara

茨城県笠間市

2018年9月 折原貴道 撮影

図a: アオゾメクロツブタケ子実体^{しじつたい}; b: 本種の担子胞子の走査型電子顕微鏡像; c: 本種に近縁な地上生きのこ(スミゾメヤマイグチ類似種; 小田原市早川)

おりはら たかみち
折原 貴道 (学芸員)

森の林床^{りんしょう}の落ち葉を、熊手などを使って掻き分けると、図aのようなだんご型の物体が見つかることがあります。これも実はシイタケやマツタケなどと同様、れっきとした「きのこ^{か、こ}」です。しかし、成熟しても地上に姿を現さず、胞子をつくる組織も外皮に被われたままであるため、一般的なきのこ^{か、こ}と違って、胞子を風で散布することができません。このようなきのこ^{か、こ}を「地下生菌^{ちか、せいきん}」と呼びます。地下生菌は自力で胞子散布ができない代わりに、種ごとに様々なにおいを出して動物を誘引し、きのこを食べてもらうことで

胞子(図b)を散布しています。

近年の研究では、きのこをつくる様々な菌類から、独自に多くの地下生菌が進化したことが明らかになっています。日本国内だけでも、トリュフ類をはじめ、約180種もの地下生菌がこれまでに見つかっています。図aの地下生菌は2011年に筆者により新属新種として学名が付けられました。傘の裏がひだでなくスポンジ状となるイグチの仲間(図c)から進化した菌で、初めは白色ですが、触ると急速に青く変色します。

*一部の菌類がつくる、大型の生殖器官(子実体)。